

証言 行倒れた戦死者の横たるる村の

沖野奈加志

五台山の道から 濱州島まで

森の中を歩き 丘をこえて

祖国の自由を 血で守る

お等は戦隊 朝鮮の息子

この証言は一九五〇年六月二五日に始まった朝鮮戦争の最中に取られた人民ゲリラの歌であるが、物量と近代兵器にたよっていたアメリカ優勢軍とその手先たちは、ゲリラ戦で多大の死傷兵を出した。

死者はまとめてへもつこに入れ、海水に浸して、日本に送られ、日本で一体ずつ組合せ（手も足も胸もバラバラがある）死化粧をし、防腐剤をつめ、ジュラルミンの棺に入れてアメリカに送った。（大江健三郎の死者

の者りらだったか、小説に出ていた。）負傷者は船と飛行機で日本に送られた。大阪では戦傷の日赤桃山病院、京都東福寺の日赤、大津の日赤などアメリカ軍に接收され、アメリカ兵が収容されていた。

戦場の負傷というものは、手足がちぎれたり、泥と錆と火傷と手おくれで死んどが手術を必要とした。手術には大量の輸血が必要であるが、アメリカから送っけては間に合わないし高くつく、それに発表とおりの勝ち戦でないことをアメリカ国民にかくさねばならない。（冬の朝鮮戦線であメリカ兵は、ウォッカをトマトジュースでわって飲んだ。フラッディ・マリー（血びじろのマリー）という赤いトマトジュースが雪にこぼれた血を理想

させたという、当時サントリーパーではやったカクテルである。）

そこで日本人の血に目をつけた。それに協力したのが日本の血（死）の商人であった。

カルゲン
造血剤呑んで黄色い血を売る

一九五〇（昭和二五）年冬ごろから、京橋のバンク（当時、ミドリ十字と云ったかどうかわからないが、人々はフラッド・バンク、血取銀行といった）に、朝から大勢の人が並ぶ者が目立つようになった。

当時はまだ戦後闇もなくのことだ、その日ぐらしの生活をしている人が多かった。

職を求めて職安へ行っても職はなく、いくらかでも金をもたねは家へ帰れぬ人は止むなくバンクに足が向く。食糧難で満足に食べさせてもらえず、小フかい錢ほしさにやってくる少年、夫婦で、親子で、兄弟でくる人もあった。

一回の売血料がいくらであつたか、わすかなものであつたことは、まちがいない。だから一回血を抜いてまた列の後へ、昨日抜いてまた今日、という人たちが多かった。その結果、血がうすい（のちに黄色い血といわれた）こと知られる人が出はじめた。そこで、一回血を抜くと玉子を三つも入れた肉うどんを食べたり、体なだるいので甘いものを飲しがる人が多いので、うどん、せんざい等の屋台店が並ぶようになった。バンクのすぐ横が国鉄東横線のカートで、それから西へ京橋の方へ向かうと貨物線の踏切、さらに西へ京阪電車のガードあたりまでいくつかの屋台が出ている。

いつも疲れた顔をした人たちが、ゆっくりゆっくりとものを食べ、終つてもなかなか立上がろうとしない姿がよくみられた。また「カルゲン」という鉄分を含んだ造血剤を呑むと血が濃くなるというので、付近の薬局で買って呑む人も多くみられた。

このように度々採(売)血するので、貧血を起し途中で倒れる人がよくあったが、救急も警察も知らんふりであった。

バンクでは、採血した人に「貧血を起し倒れても、しばらくすると回復します」という意味のことを書いた紙片をもたせ、行倒れ見逃し証明書としていた。

度々の売血で血がうすくなり、体力がなくなつて回復せず、採血を断わられ、つまみ出され、ガード下に倒れて寝ている人もたえずみられた。夜になると、そのガードの上をアメリカ軍の戦車や大砲を積んだ無蓋貨車が長々とフツいた。時には戦傷から送り返された泥と血にまみれた兵器が通る時もある。(戦東貨物線は、吹田から界に至るもと日本陸軍の軍用線であつた。)

西の貨物線も夜になると、むき出しのナパーム爆弾(大量焼殺兵器)を積んだ貨車が、行倒れた人の横を、人家の裏を、街中を通つて行く。(それは、京都祝園(現京都市)から片町

京都の七条内浜のドヤに住む佐アヤンは、夫で京都七条のバンク通いをして生活していたが、需要と供給の関係で、京都のバンクを断わられることがしばしばおきるようになった。

京都で断わられると、なるべく入場券が只(只)りで、大阪の京橋のバンクへやつてくる。カルゼンを呑んだり、当時はホルモンが安かつたので内浜で生肝を呑み込んだり、塩をたくさんめたり、血を濃くする努力をして、京都、大阪かけもちをやつたので、ついに佐アヤンは性不能になつてしまつた。

「女は月に一回余つた血を出すぐらいやからこたえんけど、男はあきまへんわ。……力カアはゼニもつてる奴に貸しましてん」

内浜のドヤに泊まる金(一日五〇円)もなくなり、京都駅の待合室を鉄道公安官に追いつ出されは、またスキをみてもどりして、時時やつて来る撮影所の「其多大勢」の手配師の弁当付六〇〇円にありつこうとするのであ

線放出を経て、秘密から阪東線への東武線を経て大阪へ、運ばれるのだ。」

運ばれた兵器は、死傷者になつてかえつてくる。兵器の量に比例して採血量は多くなり、青色い血がふえていった。

京都⇄大阪 かけもちで売血

朝鮮戦争の特需景気で一部の戦争成金が肥えたり、神武景気だ消費は美徳だと云われたが、戦争用の採血はなくなり、血を抜くだけ抜かれ体力をなくした人々は、働くこともままならず、バンクは採血者カードで制限をはじめた。

常時血を抜いていると「体がだるくなり、目がかすみ、動けんよ」うになりまんねん。それに血を抜くと麻薬うつたときみたいで、ほうつとして中毒症状になりまんのや。それで、あかんあかん思ひやらまたバンクへ行つてしまひますんや」

るが、二度三度にはボロをまじつた通行人などに雇われたが、そのうちに

「行倒れの死んだモンにも使えんワイ」と断わられるようになった。

撮影所の手配師と駅員や公安とのトラスルがある。仲に立つて難をきかせて力をつけてる通称、夜の京都駅長、秋やんというのがいて、エキストラにも使えん佐アヤんは、秋やんにどつてもゼニにならんので、手配師や公安にエエカッコするのど、他の駅泊者(注)・京都駅待合室には何十人かの人だ、いつも人買いを待つていた)にニラミをさかすため佐アヤんをなくするけるして駅から追いつ出した血を抜くだけ抜かれて、バンクをしめだされ、死人の役も出けんといわれても佐アヤんは生きてゐる。

生きてゐる限りハラはへる。金の事なんか忘れてメシを食い、何回かつまみ出されたあげくに無銭飲食をツぎ出され、世帯のことをラジオと警察では云う(注)ラジオは無銭

ことをおぼえて釈放され、バンクへ行ったり、ラジオをやってバクられたりしているうちに、同じラジオでも酒を呑むと罪が重いが、食うだけなら盛飯みたいなもん食わんじウマイもん食えという、その道の先輩の知恵もさずけられ、ゼニを出しては一生見込のなぞどうなもんも食わてみた。

「これは甲斐性でんな」と佐アヤんは言う。血イ売って我が身を食うて死人の役もせけんように弱つていた体が、スタ箱や未決の麦メシと出てきたときのラジオのおかげで、だんだん体が回復してきた。

数年後、京都駅近くで出会った佐アヤんは見ちがえる程男らしくなつていた。木津川の砂利とり場で働いているという。

「あの時のお礼のつもりです、パイ香んどくなはれ」と、あの時、駅で夜の駅長にどつかれたあじで、あでんを食べさせたことを覚えていて、あの時の店、駅前橋丁のホルモ

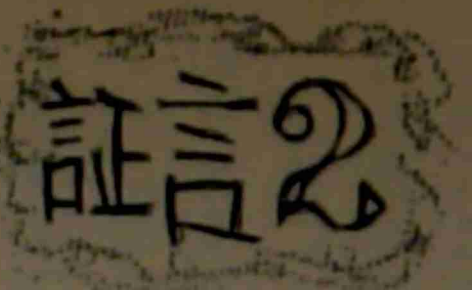
ンおでん屋でシツホの煮込と二輪通で赤くなりながら、バンク通いをしていた当時のことやら、問はず語りには話をきかせてくれた。きつと誰かにきいてほしいのせう。ゼニのある奴に貸した力カアのことをきくと、「エエのんではましても」と荷いながら、「目エだけほどうにもなりまへんわ」と貧血で目玉が片寄った(？)ときのままの目で笑うのであった。

「人の血イ扱きやがって、あれ、口紅の原料や、美服用パックに使うんやどうでんな。ネエちゃん赤いのんぬりやがって、わいの血イどつくつたんかも知れんぞエ、まあそんな庄もんのクレヨンみたいなもんどちごうてもつと高いやフヤろけどなア」

酒がまわつて佐アヤんの話はつづく。「死んだモンの役もせけん云われたワイが、我が身を食うタコみたいなことはあかん、まあこれまでに他人のものは大分食うたつたけど、ワイも食われるだけ食われてたんやさか

いにアイコヤ、ああそれにあの夜の駅長、あのガキこのへんの店にシキミでカザッタル云うて恐カッしよつて、山科(刑務所)へ行つてまっさ。人に死人もせけん云いくさつて、

おのれがシキミで入ってたらエエわ」佐アヤんの顔は誰もうらんでいない。きつと黄色い血が赤くなつたせいだろう。



証言 五年まへ京都のズバンの話

—キャベツ食つて石をなげたい— —木歌也

腹も外間もなく書いてみよう。その名は「血液銀行」、箱の暗い香香の一面面を持つた昭和三二年から三五年まで、ある野望を打ち砕かれて、食わんがために、京都市南区の国道の横にあるスラッドバンクによく通つたものである。

当時、銅匠(銅匠)と云われ、現在の不況よりもやや小型の不況時代である。土方の単価が三五〇円、五〇〇円位の時である。

俺の体内の貴重な血液が二〇〇比四五〇円

であった。あの頃、夏には今で云う青カンの連中が沢山いた。近所に「東寺」というデカイ寺院があり、そこで蚊にさされながら青カンをせし、バンクまで五行程、バンクの前には当時キャベツ畑があった。誰が云つたか知らないが、キャベツを食べると比重(血液の)が高くなると云つて、道路際のキャベツは、蝶々の幼虫、青虫の上前を八木ですつかりな

くなくなつていた。八時過ぎに比重検査番を待つ列は、すで

に国道まで歩いて行く。その数五〇〇人余りか。少ななメスで耳の下を切り、そっからカラスのストロウのようなもので血を採り、青い液の入ったビンに落とす。流のは合格、手いたらペアー、すなわち不合格である。

青カン、ノーチヤスの我々はこれこそ必死である。一時的に甘をエム輪でしぼり、ウツ血させて検査を受けるのである。幸にして死ぬれば腕に合格の大きな印を押されて、今度は体重検査。四五斤以下は採血しないので、当時の俺はフライ級で四五斤はなかつた、ボクはトに石コロを入れ、やつと四五斤、これで採血である。

二階に上ると砂糖水のタンクがあり、これを飲んで喉を潤す。俺の番号が来ると、ベッドに上がり腕を出す。これからが本当の売血である。太い針を差し込まれ、エアで抜いているのか血管と針の間がピリピクする。この時こそ、肉瘤の腫が浮小び全く麻痺気分である。

終ると、赤いフクロに入った錠剤二個と四五〇円をくれる。朝の五時から並んで、金を手にしたのは三折過ぎ。この金で帰り道にある九条署前のホルモンうどんの旨いこと。この店は今はどうなっているかわからんが、売血者で大きくなつたようなものだ。

京都には、当時、第二日赤と高野血液研究所と三カ所あった。榮通寺にあった第二日赤は二〇〇円で五〇〇円、高野の方は四〇〇円であつた。

体重のある人達は、よく、かけもちでまわつていたように思う。

釜に仕事のない現況、京都のバンクも多いとかと聞いた。でもネ、さきることなら売血はよした方がいいよ。一四〇〇円と馬鹿げた単価!! 腹が立つよね。

3言 眞で買つても、眞が買つても、眞の

——バンクはじまりのバンク・東京——

駒金哉

前略 『渡世』七月号結手せり。ありがたう。

さて、安い血を売つてゐるのぢとあざれたのだが、ホントらしいので、旧い話であるが我が、赤い血、白い血、吸血鬼と時代をうつて参りまで——と云つても、尊い血を売らなければその日をしのげない人をバカにするさないが、麻な渡世だネ、しかし、その気持を我はよくわかるぞ。人は粗末な客をしていれば白い眼で見る、ちとノリのきいたシャツを着ればデカに付けられる、とかくこの世は住みにくい生きねばならん、だが粗末な客をした奴に眞の悪人はいない。眞の悪人というのは、ニコニコと愛想の良い吸血鬼ではないか。種々な形で弄られるが、今日は血

液バンクについて聞かれた件をたいした参考にはならんが、まずそこまでの命が少し足さないとはい出せないが……

そいつはなんと当時の
方が高く売れてた

手にあまる腹わたを地に這ひせ、血溜りのなかをびくびくと這いずりまわるも、今は昔だろうか? 隣国の動乱となるや、こちらは反対に敗戦の地とさくさ時代も治まり、人権尊重など人間のネウチらしきものが安定し始めたようだ。それでも当時は、切つたはつたの嘘をして瀕死の重傷を負わせても罰金刑悪くて一、二年を禁めれば出獄だから、人権云々といつても個の生命など騒ぐ程ではな